

2021年12月24日作成(2024年12月20日一部改訂)

義高 互

○テストの効果

2016年に中学校特支学級で担任した時のことです。

英語の学習をしており、何が効果がある学習法になるかを探っていました。その時テストをすることが学習効果につながる事を知り資料に残しました。

別項目参照

同じ特支学級のもう一人の生徒もテストを呼び水にして効果を上げる学習に取り組みました。暫くは上手くいっていましたが。一人の生徒は途中で学習をするのを拒否するようになりました。テストのプレッシャーに耐えられなくなったようです。そこで彼がどの程度のテスト頻度に耐えられるか記録をとってみました。その生徒が耐えられるテストの平均回数は週一回一教科程度でした。その生徒の事を考えると、年間して一教科60回を大きく超えない程度にテストの回数を収めるべきだと思われます。

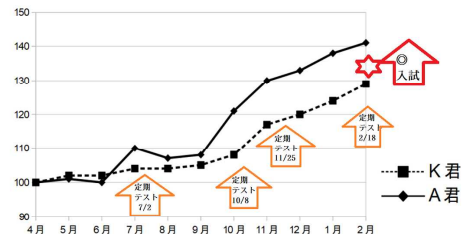
○テストと提出物の増加

テストや提出物の頻度について前の記録を調べました。1990年頃私が30歳前に教員をしていた時期の記録をさかのぼりました。その学校は僻地でした。平均で年37回のテストをしていました。提出物は一教科を一つを計算して39回の提出物でした。特支学級の生徒は年間60回のテストに耐えられます。テストの回数だけで考えると1990年の通常学級でのテスト回数の耐えられるかもしれません。転勤して通級学級を担任した時、同じよう提出物とテストの回数を記録しました。2021年の中学2年生では、提出物は490 テストは142回にもなります。内訳は別資料参照

この膨大な提出物とテストの増加は、生徒によっては過重負担となり、大きなストレスの原因になっている可能性があります。

点検することを考えたら、教員にとっても過重労働のストレスと負担は重大です。提出物点検とテストの負担だけでも、30年前の数倍以上の負担となっている可能性があります。このような学校の状況は教員の精神疾患や長期の病気休業につながり、教員志望率の低下を招いているかもしれません。そして教員の休職やリタイアは義務教育の制度を崩壊させ続けていると考えられます。

1年間の学習効果(英語プリント)



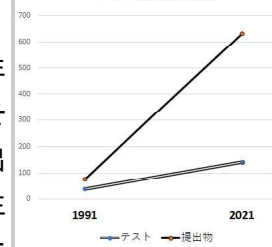
要支援 K君のテストの耐久回数

年間約60回程度

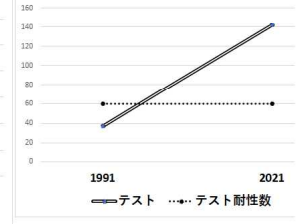
(合計60教科)

それ以上は耐えられそうにない

テストと提出物の増加



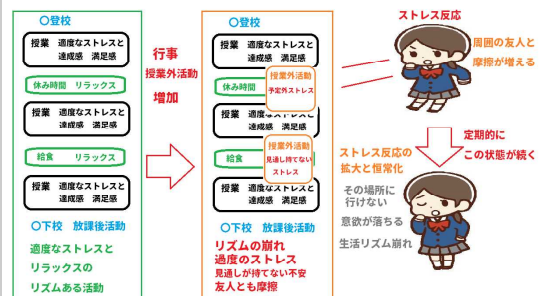
テストの増大と耐性



テストと提出物 30年間の変化

(まだ僻地ではガリ版印刷が一部残る環境でワープロ印刷がありません)

平成3年1991年度 最上地区 T村 T中学校 提出物 ・学期1回(5教科7ページ)・実技教科 技・家・美 ・学期の宿題 3回 五教科 計15回 (自学ノート任意提出) テスト 定期テスト5教科 5回 実技教科4教科3回	提出物 提出年24回 総計39回 月平均3.25回 計37回(徐実テ) 月平均3.03回 一日平均0.14	テスト 計142(徐実テ) 月平均11.8
令和3年2021年度 最上地区 S中 提出物 ・自学230-(マイノート230は計算に入らず)・各教科合計の合計年216回 長期休業の宿題25 数学検定 漢字検定の宿題 計20 月平均40.8回 一日平均2.3 テスト 定期テスト年間 24回 各教科単元テスト 86回 漢字テスト 数学テスト 英単語テスト計 32回	提出物 合計490回 月平均40.8回 一日平均2.3	テスト 計142(徐実テ) 月平均11.8



END